# 重修真書太閤記

五編　八

ヘ13
459
48

特 へ13
門 459
巻 48
福岡
同攻會印

# 重修真書太閤記五篇巻之廿二

## 景忠貂皮の奇瑞を感ずる事
## 并赤井悪右衛門尉景遠事

赤井刑部少輔景忠奇代の猛獸を獲たりしか其獸の夢想に従ひ首を一堆の土饅頭となし其神を祀りて其皮を存しゝか其驗掲焉して武威隣郷に震ひ勇名四方に溢れ家門倍ゝ昌なりけるに不思議なるも貞和四年の秋将軍尊氏卿の仰によりて景忠細川陸奥守顕氏の手に屬し河州葛井寺へ下向し九月十七日楠正行と合戦しけるか細川をし



赤井悪右衛門尉と號

め味方の陣々楠が為に焼討をられ敗軍に及びける時景忠も同じく敗走しけるに事あまりに急にして取べきものも取あへざりしが貂皮の袋をも持退をゑるある落延て景忠ありしに様彼袋なる重代の文書をぞ入れし太刀刀までも入置たりしに取出さで戦場の烟の中に失ひけると餘りに口惜かし文畝の手にかゝらんも景忠かぞ大事の物まて捨たんなど能周章しかありといそれんとまさ末代までの恥辱也いざ立還りその始末を見届んやとて葛井寺へ趣き我陣のあたりを探し索むるにあやしきもの見ゆれば引出し焼土なと拂



ひおとしてみしにそれは貂皮の袋なりけり少しも焼損ぜし体も見へねば希有のことなりとひらき手馴に一毛も損ぜるとなく其色元のまゝにて光澤まさにあるぞかしありけるに驚き中に藏めし文書太刀刀なとを改め見るにさらに火氣を受る金色焼刃いさゝか立まさり見へけるにより然ば火災を免しめんと云し靈験まことなりけりと感涙肝に銘しこれより後代々大切に重寶となし景忠六代の孫赤井右兵衛大夫家清まで氷上天田船井三郡と共に相傳しけるに武威をさらしも衰へぬ名譽遠く馳て國中に肩を並ぶる者なし

赤井右兵衛大夫家清は越前守時家の男大永五年乙酉の生弘治元年高良村合戦に疵を蒙り同三年二月六日三拾三歳にて早世し時に父時家六十六歳家清の弟悪右衛門尉直政廿九歳家清の惣領五郎忠家九歳なり然して時家の父は左衛門尉直家その父親家その父忠家その父光家なと家清六代の祖なりその父五郎三郎家職その父五郎家清その父基家なり

波多野家丹州を領するに及んで赤井は國人の随一と云を以て相互に懇志を通しけるか波多野上總介晴道の息女を以て家清の室となしたりけり





それより後聟舅の因あれはいとゝ波多野と親しく睦ひけるよりいつしか赤井は波多野の旗下の如く成にけり家清相傳の雄の貂の皮を以てさし物となし度々手柄を顕しけるか雌の貂の皮は元の如く太刀刀まきは文書の袋となし置しに家清早世の時二川の貂の皮を弟の惡右衛門尉景遠に譲り與へ我子成長して家督とるへくはふたたひ譲りわたして給候へと遺言して果けるとかや家清か卒ける時五郎忠家わつかに九歳也因て船井一郡とは赤井にて領し氷上天田の二郡は波多野にてこれを預り所務しけり悪右衛門尉景遠

かくの如く智謀深く武勇を震ひけるにより波多野にても頼母敷ものにおもひ家清が時と同じく親しく睦ひかはしいさゝかも疎意なくなしおきぬさて上總介晴通には男子なかりける故一族氷上の波多野因幡守秀行の子千勝丸を養子として右衛門大夫秀治といふその秀治の妹を養女となし悪右衛門尉景遠が妻としかゝりしかば波多野赤井の両家ます〳〵親しくして水魚の如くまさに膠漆に似たりされば晴通死去の後といへども景遠秀治秀尚とも二心なく語合けるは今度兄弟とも安土にてあへなく自害をとげしを哀れとまさに氷上の波多野父子ハ戦場に自殺し一年のうちに両波多野ともに亡ひ國中悉く織田家に従ひしかば人情の輕薄なげくにあまりありけり今歳天正七年甥の赤井五郎家正今年十三歳なるを守立赤井の家嫡として其身後見となり大敵と引受合戦度々におよぶに

流布本の説には如是たゞし赤井悪右衛門直政天正六年三月九日五十歳にして卒すと云ハ今年まで現存をしまた赤井五郎忠家ハ今年天正七年廿一歳なりとし又十三歳と云説によれる永禄十年の誕生にて父家清卒後十年に生るゝといふべし

光秀数度赤井の城に押寄合戦をするといへども悪右衛門尉よく防ぎ禦ぐ時機を見済しかの貂の皮の指物さして群がる敵の真中へ打て入無人場を行ごとく従横自在にかけ廻り戦ふありさま荒人神の如くなれば顔を向るものなく手負死人その数しれずを寄手毎度敗走をなせるにこの程景遠疔を病て行歩自由ならねば合戦の場へ打出ることはなけれども赤井一類光秀に従はず臂をとりて勢を震ふことこれあるも景遠が武勇のちからによらしむる処なりし去とて赤井が城のそのまゝにさし置るべきにあらねば光秀が勢をさし向てこれを責



させけるに景遠味方に下知しけるは当家運命をてよ盡ぬとは敵を引受て尋常に切死に死んと元より覚悟の上なれど腫物故に最期の軍おくれなんとなし得ざることの口惜さ其方達よくあきらせて今三日防げかし其の内にかゝる腫物もとくしは和らくべし痛苦さへとまらば除されば快打て出て討死を遂しとのたまふ言葉を聞よりも承りぬ御心安かれ三日四日は何様にも防ぎ申べしとて各持場々々へ馳むかふ実も剛将の下に弱兵なしとはかやうのことをや申べき光秀も今はあぐみて日々の軍に味方の手負は増とも其城は更におちる色なし如何

にとてやと案し煩らひける処へ脇坂甚内安治え
せ來り赤井に和平の利解を勧めて城を開かんを可
申存付候ハゞ御許さをあるへきやと云光秀ハし
くも思ひ付ゝたり十分働きあるへしと許しけれ
ハ甚内只一人赤井か城の大手に至り景遠に面會
したき由申入しかバ門を守る侍あやしく見るに若
侍一人外に續く者もなし白昼の事にてハあり付
入の氣遣ひもなし去ながら對面の席にて殺害と
企けることもあらんと云へかゝれ用心して然るへしと
申通しけれハ景遠ハさして何の思慮にか及ふへき
寄手の侍たゞ一人逢て追かへさん臆するに似た
り其者此方へ通させへしと申けるにより近習者か
いそぎ只一人なりとも御側ちかくハ如何あらん
と遠慮あるさに似たり殊に御病中なり猶以て御用
心候とも誰人か臆病の御振舞と申べきやし刺
客なりとも共御病体を見返り彼是と取なさんも口
惜かるへし取次を以て聞せあるべきなりと勧め
しかとも景遠ちとも聞入ず我に逢んとて来りしを
のにあらて帰させへき法やあるとや疾々此方へ伴
へとてさへ立しめて止ことを得ず近習者城門に至り
脇坂に向ひ悪右衛門尉景遠御面會申へしこなた
へ来らせたまへとて先にたちて本丸へ案内を

## 脇坂甚内赤井が城に入事
## 并安治景遠問答の事

脇坂甚内安治赤井が城へ行向ひ案内を通しけ
る景遠が近習者城門際へ立出本丸へ案内す安治
これに從て景遠が居間に至りけれバ景遠病床に安
坐したまふとも元來腫物のことなれバ顔色變をバ五
体に不仁の氣色なし側に人とも置とやまた太刀物
具も宜々しからバ近習小性を遠く退け寄手の御
使者なれバとへと招けバ脇坂甚内座に着てまた景遠
の容体をみるに少も用心の体なく我家子郎從に
對面するごとく實に大膽不敵の有樣にて脇坂を見



やり寄手ハ城を落さんことを專とし我等ハ寄手を
追拂ふを以て主とバ意の趣く処相同しかるバ然
るに不時の來臨不審少なからバ何事にやと問ハ
脇坂袖搔合を莞尓と笑ひ流石に名誉の赤井殿かな
其わとの者と何の用心もなく病床に招かれし
不敵の御振舞感るに餘りありさて今日參入の
事貴邊の籠城して死を期しなふとあまりに笑止
に存候其上某ハ惟任日向守が使者にあらバ羽柴
筑前守が手の者まて今度加勢に罷越てひが貴邊
わとの勇士又あるまじく覚候如何にもして討死
せんとなしなに志を翻し名字を永く相續あらを

たく態と参入候へとも只今の景氣を見候らくハ勿
なら志を變し玉ふまじく存候それに付て某まさ
一川己もなく所望のこと起り候へとも是ハ許さを
玉ふまじくや計りかねて候然しながら申出ねも
はた胸ふさがる業にて候如何聞入玉ふへくやと
申さる景遠聞てさては羽柴殿の御手の衆にて候
か假名ハ何といふらむそ名乘り玉へとあるに
うて脇坂甚内安治と答ふ景遠聞てそもハ播州に
て暫手柄を顯ハしたる由風聞候ひし脇坂甚内ぬ
しよな惟任が手の者ならそハ某もまさ寄手とも
おのさ候ハ某が心の奥を語りやへし波多野兩家



の亡ひしもおろかけの事ならハ某が家筋にても
鎌倉殿の置文の趣に相違候事なや六七代にも及
ひし左ゆへに波多野兩家の當國を進退せしもむ
かしの定に違ふこと多くあるへしいかんや近ごろ
との事いまへく私に出たれハ云にたらも抑國よ
守護を置るゝ國中の亂妨狼籍山賊海賊群盗な
とを鎮め百姓として其所業を遂しめんが為と承
たりいさてなそ神社の修復祭禮も行屆き佛閣伽
藍の莊嚴も頼母敷候へそも然るに世の習ひし山
賊海賊一人二人ならハ搦め捕て所當の科を課を
川へ今も既に百人二百人乃至千餘人に及ひ候へ

ハ却て守護なり手をさけ腰を屈めて夫等か裨補を庶幾さらるゝに至りあるひハ佛物を抑へ僧糧を奪ひ祭禮を闕神事を怠慢とするに及ふをもて守護の勤を勤とせハ候然ハ神その氏を厭ひ佛その類を愛玉ハんや其極をもてよ両家の上まて知ゝ候両家の滅亡ハ両家自求られそ致しけハ何そ織田殿を咎申へきんや某とても此道理をハ知たれとも大廈の頽るゝ一木の支ふる所にあらねハ某一人何とおもふ共其詮なけれハ今日に及ひし也勇士の眞實敵味方の隔なし脇坂ぬしの別の所望とハ何なとそや但そもとも大形に推量してハへとも今日その

意に任をめさしと云ハ安治も両眼に涙をうかへ背に汗して申けるハ赤井殿の御心中の涼しさ今程世に希なるへく承りて候然ハ何早く織田家へ御参りの上往古の定を遂て御領知を安穏になさされをハや左てのちに御家系も遠く榮へ申へきに波多野と睦られハ名殘とのこ慕られハやらん逆を去て順に皈し邪を除て正を佐くとやらにてもハやらんに幾度も申入ハ事恐多くハ候へとも此城の落んこと遠からハ御自害あらん日も無下に近くなりてハ益なき波多野の為に累代の名家を斷し給ハんこと惜御事なりハや今一應御思案も候ハて

やと云景遠はかゝる安治ぬし左様にいはるゝ共
弓箭取の義といふものハ一度同心して永く違へ
を死して後までも約せしその變らぬを頼むなれ
されバ越後守仲時の番場にて自害せし時同しく
腹を切しもの四百三拾餘人どもや相模入道宗鑑
葛西谷にて滅亡し時までも志を變ぜず付纏ひ共
に東勝一片の烟と立昇りしもの八百餘の多きに
至る此人々の中にその順逆を知たるものなどか
無らんや然れどもこれと云ものなく等しく死し
て武士の意地を全くせし景遠も波多野か家斷を弓
矢の勢盛なる時にてたまひて速に織田殿の御

陣頭へ馳参らんとも思ひし只今波多野か家滅び
惡しく打止めらると云て後箭射かくる者の無ときに
至りておめ〳〵と参上仕りハ共左様に意氣地のか
ふなき侍を織田殿何とおぼしめさんやそや斯事に
於てもまさ云ふとなるべし聞もせじ詞どふなり
と謂てその後脇坂ぬしの所望ハ數ならねとも某
が家に寶として傳へし物あり當城落ハなんとき
亂軍の際に滅びもせんとの心遣ひにて正しく相
傳あらんと思へるなるべし夫も宜なり世にた
めし無事にもあらじ桐花の紋ハ安家の紋なりし
を八幡殿安倍の貞任を亡し給ひし印にこれを傳

えらせと今八幡殿の流の源氏まてこれを用ひらるゝなかり然るに我家の寶といふハ元來神靈あるのなれハ火にも燒ず水にも溺ず世に類なき品なれとも敵といふ名の付し脇坂ぬしに讓るへき法もなし不日に和主の手に入ことあるへし但その時その品のことにあらハ夫に加て遣さんのあり能秘藏して給はへと云て景遠もいさゝか面をそむけしハ不覺の涙に咽しあるへし良ありて景遠あゝ和ぬしハ生前たのこあり今のまさ廿五六なるへきに武勇といひ知謀といひ等倫に超たる遠からハ戦の塲の土となるへき景遠か武邉ハを



べく和主に讓るなり我邦ハ狹し一天四海三韓八閫の外まても其名を轟かしおくと何の心もなく言りることのたのもるしいちじるく安治なるして朝鮮に押渡り武名を海外に傳へたり景遠か云州る詞の兆となりしそ不思議なり安治今ハ所望の品とももからさまに云出難くハおめへとも今日ならそ又緩々と語り出ん便宜もなしと思切て抑赤井の家に貂の皮の名物ありとおゆ一州ハ貴邊の指物まて雄の貂と承たる然ハ外に雌の貂あるへし雄ハ戦塲まて度々見うけそれは雌ハ一度もなきと見れ如何なるかのよゆ思束なしといふ景

遠答て雄の貂ハ弓箭の上まて渡し申へし八幡殿
の桐紋よあらひゐへ雌ハ後よ送り遣さんとのよ
添てあそと約束し互よ意ありけよ別されり
流布本赤井問答ちるさる正説よ反を因て今是
を攸刪く

重修真書太閤記五篇巻之廿二終

# 重修真書太閤記五篇巻之廿三

## 赤井悪右衛門尉景遠討死の事
## 并脇坂家貂の皮乃事

脇坂甚内安治ハ赤井悪右衛門尉景遠と約束して
出雲の城を出惟任か陣よ加へり光秀よ語りける
ハ安治城中よ入景遠よ面會しつる序よ城門の番
士かうして近習小性の容体を窺ふよ何も勇氣凛
凛として尋常の者ならハ實も剛将のもとよ弱兵
なしとハ是等人と申へく候安治随分道理を盡し
て諫しかとも更よ聞入を腫物よ難むと以て此五

七日戦場へ罷出に候ところとて程なく潰て膿出座
しさあらんなる打出て見参し候へしと云くいう
にも思切し体なく候但病中とるのへその氣力大
形邊を拂て見え候嗚呼悪右衛門尉と名よ立しれ
との武士ら如斯思定しあれお近き内よ切て出最
期の合戦花々しく為へきこ了見と見認て候因て出
城降参のこと申も出ゝは然い一戦のうちふ互の鋒
鋩を争ひ其上ふて當城を攻落し給ふ為く覺えゝ
と申せる光秀も如斯らんにおふ力なし攻支度して一
攻せめて見んやと下知しけれい總軍一同ふ楯竹
束を用意し明朝早天よ城攻あるへしと觸たりけ



ゟ夜誰とい知を脇坂の陣へ來うて今夜兼々約束
をし重寶を授くへし隨分く大切よ守護ある様頼
み入候とゆて幼稚男子と雌の方の貂れ皮の袋一
川兵士よゆこを搦手より出し伴ひきてる安治請
取て兵士を呼近付意をとらわらせし贖ものたしら
ふ預り參らせとは安治ゟ命い竭るとも頼まれし本
意い變う不申候と申せとて兵士をと返し幼稚の
男子をい直よ近江ある小谷の我宿所ふ落し遣うし
ゐる知との更よあらうらし也是幼稚男子のちふ成
人して赤井九郎次郎と云惡右衛門尉景遠いめや
うに無らん跡の事まて取まうあひ今い心よめう

るゝともあし片時も早く討死をせんやと思ひしかバ
城中の諸将士を集めて酒宴をもよほしけり
何も今日を限りと思へバ互に意を残さじと大盃
と引受く飲廻し武士の交りしゆかな鳴ハ瀧の水
と拍子をそろへく舞つ躍りつ心々におのびざりし
城門とは一所に出るからら屍を何處に曝さらん死
手三途の衢まて何も落合軍の次第を語らふぞ酌
や酒やと囃子たて酔のまぎれに立上り鎧を肩に
抛掛馬に打乗城門を八文字に押開き遅兵五百餘
騎隊伍をさゝさに突て出る景遠が出立こそ勝まて
目に立見へたりけまつ白綾の鉢巻し腫物をそ



白布にてしつかりと巻いつも好む腹巻の上に鎧をと
かさねて着貂の皮のさしのさし八寸にもあまる
る黒馬に黒鞍置茜染の厚總かけ十文字の鎗を提
沓の子打たる寄手の中へ面もふらん撃て掛り矢
庭に七八騎切て落を寄手ふもとに辟易し右往左往
と逃散たり景遠淂たりと馬かけ居寄手ハ雲霞の
如く眼に餘りしかも城々を落し歴々を打取て多
く手柄の面々ぞや我等ハ今に落武者まて其上に
援くる味方ハ一人もなし驅るも引も五百餘騎一
人討るれハ一人減何程の事の怖しくて左様に各
各逃るらんさるし人々に返をや寄手の面々と

大手をそろけて追めくる惟任勢へ貂の皮の指物
さしたるハ城の本人惡右衛門尉ちれこそ聞ふる
名譽の士あるしく馳合て過をろ、唯遠矢よ射そくめ
ふと爰ふ走りめしとに押詰散々よ射る光秀たる
りよ是を見て惡右衛門尉ゟとの勇士を遠矢よ射
ふとひふとやある寄合て手詰の軍をよ壮者と下
知をきしハ明智左馬助光春同次右衛門尉光忠藤田
傳吾溝尾庄兵衛尉以下究竟の者共真先よ進めハ
赤井ゟ手の者馬を一処よ打集め天晴敵の振舞や
五六千騎もあらんをらめ我等いそうりふ打残きて
て五百よ足ぬ手柄のゟとハあらそれたり爰を墓



しく處とおめくやと喚き叫んて戦ふ聲上ハ有頂天下ハ
金輪際まそひゞくらん天帝帝釈の戦ひもあとよ
ち過しと見えたりけり景遠颯と馳ぬけて我勢と
見をち五十餘騎よそふりにあり此勢ふても打破
り城へ還らハ還らるへきもとも當家の運命おゆ
つぞ今日を限りあり今一軍せそやと五十餘騎を
前後ふ立群々とらつと寄けきハ惟任勢誰ら是ゟと
いふまもなくまさ散々よ打却きしを見て脇坂甚
内走り向ひ鎗を取て五六十合そ突合たり景遠ハ
今朝より數刻の合戦ありて殊よ腫物痛けれバおゆ
ふやと槍の柄も取りさくおゆひしふより槍を投

捨無手と組て両馬か間に動と落折しも赤井か腫
物潰て堪かさりけるにや景遠閉目て働かんと安
治首を取に忍ぞ少時猶豫しけると景遠大の眼
を活と見開き敵を押えて躊躇ハ首を他人え渡を
積か臆したりると叱りけるにぞ脇坂急度心付終
に赤井か首を取城に残りし者とも斯ときくより
皆々打て出敵に駈向ふて討死とるもありあるひ
は差違て死とるもあり時の間に城中悉く死果て
出雲ハ惟任か手に入にけり脇坂甚内安治ハ景遠
かさしもの貂の皮を分捕してけるハ今こそ雌
雄二つ手に入つると大に悦ひかつ景遠か志を

感しけるを秀吉に申出しけれバ秀吉も安治の功を
厚く賞せられしと也斯て丹州平均の由を安土へ
言上せしかバ信長にも悦喜ありて約束の上ハ弥
相違あるへからずとて丹波一國全く光秀に賜ハ
りけり

信充云此時まて光秀江州佐和山志賀坂本十八
万石を領せしに丹波三拾六万石を加へ合を五
十四万石の地頭として丹州龜山に住せ
光秀たちまち一國の主となり抜群の立身なれバ
君恩を重んし忠義をつくすへき筈なるにさはな
くして織田殿の心中をつらし怨めしとのこれりに

て明し暮しけるも也扨また播州平山まて立羽柴
筑前守秀吉別所征伐の謀略を工夫し居たりける
ふ丹波一國平均して惟任拜領をし由を告來りし
かバ秀吉これを聞丹波ハ別所が所縁の國にして
赤井悪右衛門尉の室家と別所小三郎長治の内室
とハ兄弟ゆゑて共ふ波多野の息女なれハ波多野と
も三木より助け三木よりハ八上氷上の後詰を頼
みたのまれしなるふ丹波平均ふ治りしなれバ別所
が一臂を斷しとおなし然らバはやく此ことを三木
城中ふ告へきなりとて例の筑前守の熟練たる術
を以て神速ふ間諜を放ちけるに忽三木城中へ秀

治秀尚の安土ふて自殺せしこと赤井景遠の戦死具
さふ聞えけるにより長治夫婦大ふ愁傷し憑む木
の下ふ雨の漏心地して此上ハ毛利三家の出勢を
まつより力なしと密使を馳らせ頻ふ是を催促な
したりけり然るふ備前の國の浮田和泉守直家ハ
去年より東西の勝負を窺ひ織田家や勢強き毛利
や謀らしきと見合を居たりけるが上月表の對
陣の時織田方ハ追々ふ勢ひまさる見其の氣世を掩ひ
川へし就中羽柴筑前守播州數度の合戰ふ打勝て
別所方のつはもの多く討も威風高砂の松となひ
かし又西丹波の天田氷上の郡を暫時ふ平均し波

多野宗長宗貞荻野朝道なとを滅し惟任光秀ハ東丹波の八上出雲の城々を落し多紀山國の郡を平均し其勢破竹の如し斯て丹後但馬迄も織田家の旗の手に靡きぬへし然ハ播州も程なく平均すへし播州平均したらんにハ備前美作へ討入なましし毛利の國ハ十餘國といへとも次第に縮り信長の國ハ尾勢江濃越丹飛州若州山城大和和泉河内攝州等にまたかり日々にその堺を益月々にその地をひろむ只今織田家に敵對したらんにハ我家たちまちに滅亡をとんとれ早く思慮を廻らし毛利家の威權格別におとろへさらんうちに織田家へ隨



順をなして國家安全の謀と云へし面々何とか思ふぞと家子郎等を招集て評定なしけるに何も一段の計なるへしと決着なしけれとも織田殿へは何誰人をしてか申入へきやと云に何も羽柴筑前守秀吉ハ織田殿の内にて隨一のものなれハ是人に就て申入候ハゝ然るへしと云義に定まりしとも誰かある筑前守と親しかるへきと去とて侍中ハ秀吉とも度々弓箭に及ひしなれハ今更に我使して申入んと云ものなし且侍ならはしかるへし爰に備前岡山の市町に魚屋彌九郎と云富饒の商人あり直家の許へも出入して心易し殊にハ福有の者なる

り時として軍用を辨ずることもあれハ浮田の家中
にて重きものに取たてられける也彌九郎老年に及
ひて男子なし泉州堺の町人小西如清といふものの
子を養ひ子とし我身ハ隠居し彌九郎と云名を
ゆづる今年廿六歳長く大からにして力強く色白
く人品骨柄勿々商人とハ見えず此者秀吉と一面
の知由あると云辨舌さハやかに何處へ使として
差立たりとも仕損ずることあらじと衆評定まりし
かく浮田家中某と似合の名を付て遣さるへしと
と勧めけるにより直家さらば其者呼べとて呼出
し見るに何さま才發らしく容儀進退尋常なりけ



れハ直家側ちかく召よせ大事の使なり首尾よく
せよと云ハ彌九郎畏り商人にて候へとも殿の領
分に住居して相応の利潤を得て妻子を安樂に養
ふものにて候恐多き申分なれども殿の御家人の
御名を許されたまはらバなほ涯分の忠を勵し思
召の通りに取扱ひ申へく候御心安く待たまふへ
く候と事もなげに申けれハ直家大によろこひ神
妙神妙此使者仕課たらんにハ侍となし所領を與
ふへし我家に奉公をすへきや否と問ハ彌九郎夫こ
そ年來の本望なれ但それハまづ後の事然者使者
の用意をなすへしとて衣服を改め太刀刀を帯し

召供十人ばかりにて小西彌九郎行長と名乗播州
路をさして旅立ぬ
一説に京の町人小西壽淂といふものゝ末子一人
岡山の買人魚屋彌九郎と云ものゝ養子となり
父に代りて彌九郎と稱し直家の伴として上京
をなしも也此彌九郎は秀吉のいまだ猿といひし
時より交りふかくありしとて諸方の物聞のた
め京にとゞめけるが後よりは秀吉の家人となり小
西攝津守行長といひし是なり

## 小西彌九郎播州へ使者の事
## 并竹中半兵衛尉死去遺言の事

小西彌九郎行長は浮田和泉守直家の使者として
召供花やかに支度なし播州平山の陣に趣き備前
國浮田和泉守直家が使者なるよし案内せしかば
柵門の番士申次て本陣に通達をしに筑前守聞て
やがて只今使者とさし越すはなどとく來るな
らんとおぼしめしのとてかくと打笑ひその
使者これへと下知をしければ申次の番士さまと案
内し秀吉の前にさし居たり小西かしこまりつくあ
たりを見るに秀吉の居たまふあたりに茶箱茶壺など
と取ちらし小童に茶挽を何事もなげに取散たり
彌九郎謹て禮をなし浮田和泉守直家言上仕る織

田殿西國九州までも御仕置あるべき由承り候依
て直家御先仕ふまつる度く存じて使者を進上仕
候筑前守殿は中國の探題と承り候よろしく御取
なし願奉ると申ては此旨聊以偽はこれなく候さ
て某事は御見知もあるべしやと申せば筑前守なを
を聞使者の面をみまもり見し心地のさらくなよう
能々さしのぞき見れば京にてむかし見しの也
筑前守手を拍てあるうあり何ふして其方は備前
へ行しぞ能歩行男なるが立帰りていつくふかを直家
毛利をそむきて上月を攻させ尼子勝久兄弟に腹
切せしに非をや然は別所を滅ぼしてのち作州に

り備前に切入直家を一番に打亡し藝州に至る度
く思ひ定めし処なり直家なの事を推察し左様に
申とも心中實に許るべくうれ我先鋒に加えんこと
容易に許し難しといへやと云を聞て彌九郎御辞
を返し候て近頃恐入て候へどもやゝさねる其意解
かさくば直家備前美作を領し暫く毛利の手に従
ふ身にて候へ共一旦御敵にも罷成て候上月出張
の時毛利の催促止ことを得を候によつり人数をは出
しては候とも直家は出陣仕らず候尼子と毛利とは
久しき怨敵なれば誰もく存知の事にて直家ら勧
めし処にはそれ且彼兄弟織田殿の真の御家人に

も候てハ旁以直家か御不審を蒙りしと畏入て候
此事思召直さるまじく織田殿の御代官として
中國探題の仰を蒙らせ給ふ筑前守殿の御旗の手
に中國の者か従ひ靡きしと更に僻事にはなしぬ
川直家まてよ上月陣のことにて御不審を蒙しるべ
き身にてハ候と御免許あらバ備前の國人と
も直家さへ御免にて御先鋒に加えられたるまし
ていさゝんや我等に於て何の子細かわるべきと安心仕
りて御旗を迎へ奉るべきにて候ハ左もなれバ直家な
き中國御征伐の御手本となるをなるべき身にて候
ふまじ直家二心なきしるしに最愛の子息今年七歳



に罷成候を御陣頭へ参らせ置候べしと詞ふとハ
理明らかに釈きけるを秀吉ふかく感心し
直家の使者ふく申たり其方ハ見し心地のするぞ
備前のものにてハ有べからず川ばかりと有し
とき彌九郎かしこまり實に某ハ京の者にて岡山
の魚屋と申ものゝ養子にて今年廿六歳に罷成候
殿のむかし壊の庄官ともを召とおひし時見参に
入て候へどもそれや十餘年のむかしにてハ恐ある
しき御眼力かなと申をふかくより秀吉も亦直家かそ
の方を使ふ立しを深き心あるべし直家か郎等共
も使として入来らねバ上月福岡までのことを怖畏

と見へたり然れハ早く人質の子息を同伴をへし左
あらて後安土へ注進し本領のことを申行ふべきな
りと申渡されしから彌九郎かしこまり申て退出に
およ天正七年六月中旬のことなり
織田家譜に浮田直家の降參天正五年十一月の
ことにして一書に天正五年十一月織田家の加勢上
月に着とき直家養子基家并に家臣沏波隼人入
道如慶を信忠の錺磨の陣へ遣さして信長に音
信を通し織田勢上月を去て尼子兄弟自殺をる
と聞や否直家両川の陣に至り勝利の賀を述両
川其表裏を知直家播州を進めて両川を黒澤山



に陣をしめ八月三日明石飛騨守の八幡山の城に於て
両川を殺さんことを謀りしに明石及び直家の弟忠
家此謀を両川に告るによつて両川急に本國へ引返を
囮て直家織田家に降るとのへり今並記して參考
に備ふ
此事安土へ言上をんに竹中重治あつて叶ましと
て重治出立んとをうに俄に暑氣に侵されうそめ
に打臥けるか既に大切に見へしによつて秀吉枕上に
來り親く取抱かしめハ重治起直り浮田降參のこと
御取持あらんに人質の事をへき獨すて決しゆふ
へからんか筑州へうること存候とて此程書しのお

り参らせよとて一巻の書を取出て渡しけれハこ
れを披き見るに信長の胸中に出入せしこと明白
に往古來今のありさまを記したりけりとあり筑前
守涙とゝめふところに終りこのことたしかに守るへしさ
もとも今ハ甲斐なく見へし口惜さいかんなしと
深くなげくも詮なし六月十三日重治終に卒りにき行年卅六
歳なりしとぞありける
流布本五十一歳とあり豊臣譜および竹中系譜と
に卅六歳とあり因てこれに從ふ又流布本廿三
日とあり

重修真書太閤記五篇巻之廿三終



# 重修真書太閤記五篇巻之廿四

浮田直家人質を送て降参の事
并三木城兵粮運送の事

竹中半兵衛重治播州陣中にて病死せしかば筑前
守の歎き大形ならず就中加藤虎之助清正福嶋市
松正則片桐助作直盛加藤孫六嘉明ら等いづれも
重治が教導を請し者共なれば師恩を慕ふ餘り愁
傷なはだし筑前守重治が病死の趣使者を以て
安土へ言上し序に浮田和泉守直家使を差越先鋒
に加はりて忠功を盡さんことを所望如何せさせ給

ふへきふやと伺ひけるに織田殿竹中か病死を惜
まを給ひ少時落涙なし給ひけるか重治の嫡子源
助重門生もてたつかに七歳なれバ弟の久作を召
出させと兄重治の代として播州に下向し軍役を勤
むへしと定めらもと次に浮田直家のこと中國筋一圓
筑前守に任せらるしうへハ秀吉の心次第に申付
置させ処上意を窺ふまと神妙の至りなり殊に感し思
召る能々穿議を遂心障の事なきに於てハ先鋒に
さし加へ軍功を勵しむへきさ旨筑前守に傳へいへと
久作に申渡さるもしバ久作御使を兼て播州に下向を
筑前守ハ上意の趣を承てり重治ハ神に通ドける



かな人質取極めて候安堵の御朱印下置とい様に
と言上したらんにも如斯までの首尾には有
し重治か申を詞によりたとて十分の面目を施
したんなれと操返し悦びながら去程に魚屋の小西
彌九郎行長は備前へ引返し直家に筑前守の口状
を學び聞せしかば直家大に悦び然ハ織田殿の朱
印を申賜らるべしにやと問彌九郎答て云く其義ハ
筑前守か心得ては尤人質を差出し候てのち安土
ゑ申へしと申ては早々例の二男の八郎殿の御上
アを急かをねふ屆く夫に引續き直家上洛御禮申
さるへしと筑前守申候間中國全く敵となり候上

ば直家出國迷惑たるべきか左もなくて家督與太郎基家と名代として上洛申べきか是は國に皈りてのち評定して申上候べし御禮の時御朱印は被下候へと堅く約定仕りぬと申けれは直家をもて然るべく計らはしめけるか併八郎か事は直家片時も傍をはなち難くおもふ者なり是にかはりて如何せんと躊躇の体なりしかは彌九郎いはく鍾愛の公達なれはこそ筑前守も殿の詫ことをしたまふなるべけれとその上に秀吉か二男の實子とと申てはひしもの何とて否まをまふべき但御安心の御為なり八郎殿の御傅に彌九郎罷越候べし朝晩御側に付添少時にも離れずして守護し參せ候へしは且は播州陣の大小事を内密に注進しはせん爲にと然るへく然者御傅と間者と一人の身にて兼候へしと辨舌をふるひ理を盡して申けれは直家も淂心し即彌九郎を浮田八郎の傅となし筑前守の陣処まて送り遣たりしなりさて秀吉も直家の表裏虚妄頼みかたきことを知と云とも此八郎をとりては四十に餘りて始めて設けし男子とて秘藏なる由と聞保ちつゝもいよも僞の降參ならはあらしと信を取しなるへし是小西か秀吉の胸臆をよく了淂たるちしめと云へし小西益筑前守の意を邀へ志を悟

あそてこまに周旋なしけれどもいつしか筑前守の氣
を取をましより他事なくもてなさし加藤福嶋か
と同じ様になしけるを加藤福嶋はあさねてに
おのよなるべし理なるかな加藤福嶋は武藝を專
とるなし常に矢玉を侵し鋒鎗を避ず霜雪の濕に寢
處し風雨の烈を厭ふことなく股を鞍韉に磨傷し髪
は縁塗に解乱し手に射韝を脱間なく脚に草鞋を
放さず汗馬の勞を勞とせずして唯首級の數を増
んことを庶幾せる壯士の意と利口辨佞を以て機嫌
を計り珍玩奇巧を求めて耳目の欲を恣にし朝に
は甘言を述て主の趣を探り夕には令色を以て人



の愛を釣んことを要とせる追從者とのいから鉾
楯氷炭して遂に相悪よいさかること實に一朝一夕
のことにあらずは浸潤の致を処なくに起りしと云匪
し然とも彌九郎よく筑前守と直家との交際を和
しけるよより直家は秀吉の八郎を愛せるを喜ひ
て厚く筑前守の許に禮を盡し敬を致し筑前守は
直家が禮の懇なるを徳とし敬の至りとるを重さを故
を以て直家が詐譌奸謟なるも愛子の情切にして
敵を敵とせざる怨を棄て恩を施し終に備播の間を
のつから和融しけれども直家養子浮田與太郎基家
を名代として上洛せしめんが為まつ播州に來り

秀吉ニ相看し其進退を議りけるに折節織田殿攝州昆陽野に在陣ましましけるを以て秀吉基家を具し参上し浮田和泉守直家御禮として伺公仕るへき処毛利三家の者作州へ亂入の企ありし風聞しきりなれハ間遠く境を越ることを氣遣らしく存けれ故ニ家督與太郎基家を以て御禮申上る由を披露ありけれハ織田殿御前へ召出され直家筑前守の一味として中國征伐の先鋒たる由神妙の至りなり本領安堵相違あるへからすと云て朱印を給ハりしかハ基家これを頂戴し面目を施して歸國し直家ニ織田殿の懇切なることを語り朱印を捧け本領





相違なく安堵をなすへき由呉々仰られてひと申けるニより直家もまた望の外の首尾を悦ひ是より無二の味方となり毛利と實ニ手切ニ及ひけり是ニ於て毛利輝元ハ浮田か織田家ニ降参せしと聞て實ならハ棄置へきニあらす早く是を制せんと定めて珍事ニ及ふへしとて評定取々ニ一決せさりける内ニ浮田直家伯耆國羽衣石の城主南條伯耆守元續小鴨左衛門尉元清を語らひ同しく織田家ニ與力合体せしめけり

伯州羽衣石の城主南條伯耆守元續弟小鴨左衛門尉元清の父豊後守宗勝ハ無二の毛利方なり

けるが元續は尼子牢人福山次郎左衛門尉が諫
に因て秀吉の許へ天下の御下知に可従由申送
しかば信長感悦まし伯耆隠岐出雲半國宛
行るべき由返答ありけるによりて元續時節を待
て居たりけるが元續が忍て姫路へ上るとありけ
る飛脚一人を枚原盛重に捕らる一人は三澤攝
津守に搦められけると何も吉川元春の許へ引
せて其飛脚を穿議をしに書札は信長への音信
ありければ元春伯州久米郡留海城主山田出雲
守直重を召て元續が叛心を告ければ直重なるを福
山次郎左衛門が所業なり元續が胸中より出し

とおもひて福山を斬べしと云て歸國のとき南條
が家人追々來りて時宜をのべける序福山も來
りしかば止めて晩炊を用意せる間圍碁をしめ
其勝負に心を入て油斷せし処を撃と云是天正
七年四月中旬の事なり然は南条兄弟の信長に
降参せるは其より前の事なるべし又毛利輝
元吉川元春小早川隆景四万餘騎にて作州へ打
入直家の小寺畑の城を攻しは天正七年二月九
日の事也十二日小寺畑落城せしかば十六日大
寺畑を圍むと云
毛利家領國の内に叛逆の者あると討平げん爲作

州伯州の間に合戦止時なけれハ播州の別所攝州
の荒木なと如何程に加勢を請来ることを出勢をなすべ
き路塞りて匆々後援おもひもよらず是に於て荒
木攝津守村重ハ伊丹在岡の城に居たりけるが中
國へ手遣ひ便利の爲とて八月廿二日の夜従者五
六人を従へ尼ケ崎の城へうつりけり
一書に村重在岡を立退て尼ケ崎に入しハ天正七
年九月二日の夜の事にて乾助三郎に重代相傳の
葉茶壺を負せ阿古々と云大力量悪馬乗の女を
召具し卯花威の鎧を着五枚兜に多羅木打て唐
の頭をうけ三尺三寸の太刀に九寸五分の鎧透

弓ハ五人張の群重藤弩俵ら川を引付手矢をたか
り取て昆陽野の池より忍ひ卯刻に尼崎に入と
あり
播州三木の城中にてハ次弟に勢微に兵粮の貯も
多かりされハ明暮毛利三家の援を待しかとも其
音信絶て上下心をなやましける処當春毛利より
別所見継のため兵粮あまた船に積能美兵部児玉
兵大夫奉行して魚住まで來りしかとも羽柴筑前
守秀吉魚住より三木へ通ふ路に要害を構へてた
きを妨けるにより兵粮を入ることあたハず空
しく引返しけると云甲斐なし如何にもして羽柴

の砦の手薄なる方より運漕さゝんとて再度播
磨洋に船を帆を魚住の邉より三木まで四里の際
を様々にあやいろしかとも羽柴方に防かれて
かそか敷も入得さりしと也

流布本平田合戦の条と重複混雑せり故に多く
改刪せり或は平田合戦を此條と合せ讀へしと云

## 大村合戦三木方敗軍の事
## 并中國勢播州三木退去の事

播州三木の城中にては輝元より加勢の来る後詰
やあると暗夜に燈をおのひ病る人の醫を望むか
如く明ぬ暮ぬと待くらしけるに輝元作州伯州の



合戦いとまなく掛て思たゝぬとにはあらねとも一
日一日と延引せり然共一向に頼まれしをなせとは兵
糧なとは度々送らせけるによりて海上に馴たる浦
能美兒玉なとを奉行として播州灘を漕せて魚
住の邉より三木へ入けるに首尾よく入終せし時
もあり又は羽柴が兵士にさゝえられて入得ぬ時も
有しかり然るに天正七年九月十日の夜は高砂の
浦より加東の室山へ着て三木の城へ入るへしと定
めたれは三木城中より案内のため迎ひとしてか
ねて藝州より加勢に来りし手嶋市助雑賀の侍に
土橋平允渡邉藤左衛門等百餘人弓に矢をはけて忍

ひ忍び魚住へ出しかバ藝州の住人生石中務を大将
として逞兵数百騎警固の為として馳向ひ兵糧を
も雑賀の者八千餘人に齎せ平田の付城の後より
三木城中へ入れさせ夜明る頃になり大村に着て
狼烟を挙ける處平田の城中以の外に色めきける
と見て藝州勢兵糧とも雑賀衆ともに運ばせを手
島渡邉土橋等ハ平田の付城へ横合より押寄塀柵
を切崩し無二無三に切入んと雖付たり三木城中
にても大村の狼烟を見や否や時分はよしと打て
出真一文字に平田の城へ乗入んとひしめいたり
筑前守此旨を聞兵糧入させてハ叶ふまじと打止め

なしと下知しつゝ馬引寄てひらりと打のり在合兵
士一千餘騎平田をさして急がせられ但こたびと
合圖を定めし合戦なれバ必定諸所に行のある為
なき不用意にて過さるなと三方四方へ手配して備を
立なれば隙ありしかば平田より加勢延引に及ぶなら
城を乗取べしと頻に告来りけれハ筑前守大
に驚きそれや一大事なり我に続けものどもと
馬を早めて寄らせけるを中國勢と三木勢前後よ
り揉合せんとなしけると見て三木と大村の中を
掛へだてゝ戦へやと下知しながら笠坂の上より打
向へる別所山城守三千許にて大村表に静まり返

て扣たるを見とる敵ハ思ひしよりも多かりけり
と筑前守も悃もそて馬を亀居見合せ居られける
か大音揚て平場の軍に大敵をうけ尋常のごとく
出合く戦ひて必定負軍をなし一処に集り駈散せ
とて鋒矢形に備を立てかゝりけるを見て三木方
三千餘騎鶴翼に開き中に取込うたんとし筑前守
真先に進ミ十文字に破て巴の字に追廻し敵ハを
てに負色そ進やの共駈に壮者ともと麾を打ふ
り打ふり下知をせれハ山城守も再拝を取て先にまた
ち引なそのとも爰をちらさじと亂れ立たる馬の
足なきを揃へて揉立しかバ又勝色と成にけり實

に軍ハ大将の指麾によるものなりと知をたり筑
前守の馬廻りに扣へたる加藤虎之助清正福嶋市
松正則加藤孫六嘉明堀尾茂助吉晴何も一騎當千
の兵士なれバ爰を破らせてハ誰に面を向べきやと競
ひかゝりて槍を合せ太刀を交へ電光石火の烈さ
バ譬を取へきものぞなき執荊勢の生石中務をそ
しめ手嶋土橋渡邉平田をそて大村みなを集る
筑前守鞍上に立上り中國勢うしろへ廻ると見ゑ
たりさとも是ハ元より加勢にて當の敵にあら
バ前なる三木勢を打やぶられ自然と潰へしそ
の上にかねて設し陥阱に馬を馳倒され破れをあん

後ところな唯一向に進めくと大音聲に下知をれな山城守が勢とも是を聞けれ智謀たけける秀吉なりいかなる奇計をなしつらん計り難しとてにも陷阱とや構へけん油斷して過すなと進め給し処ゑ所々の付城より羽柴方中村孫平次宮部善祥坊加藤作内淺野彌兵衛等打て出鬨の聲を揚て中國勢の横合より槍を入明石魚住の浦々に漕列ねたる敵船の兵粮ハこと〴〵く奪取して味方十分の勝利なる運の盡たる中國勢を皆殺にせよと聲々に呼ばゝりけると聞て筑前守の後より攻かゝり生石土橋渡邊等船を奪れてな如何せんと浦手とや援





に山城守とや助くると二の脚ふんで進み得ねたる雜賀の兵士の兵粮をとりけるものまでも周章ふためき逃たりけり筑前守が手の者ハ勢猛く責かゝりければ山城守が勢とも過半討散されちり〴〵に百餘人になりにければ漸に引ますとひ棄散たる兵粮を取もたで三木の城中へ還りけると筑前守旋風の如く追懸しかバ山城守既に討るべかりしと淡河彈正定則返し合せおのれと戰ひ痛手あまた負しかば腹かき切て死したりけるその間に山城守からくして城に入にけりかゝりしのちな中國勢播州を引拂ひ本國へ引返し

重修真書太閤記五篇巻之廿四終